

ジェンダーギャップ指数(2021)  
上位国及び主な国の順位

順位	国名	値	前年値	前年からの 順位変動
1	アイスランド	0.892	0.877	-
2	フィンランド	0.861	0.832	1
3	ノルウェー	0.849	0.842	-1
4	ニュージーランド	0.840	0.799	2
5	スウェーデン	0.823	0.820	-1
11	ドイツ	0.796	0.787	-1
16	フランス	0.784	0.781	-1
23	英国	0.775	0.767	-2
24	カナダ	0.772	0.772	-5
30	米国	0.763	0.724	23
63	イタリア	0.721	0.707	13
79	タイ	0.710	0.708	-4
81	ロシア	0.708	0.706	-
87	ベトナム	0.701	0.700	-
101	インドネシア	0.688	0.700	-16
102	韓国	0.687	0.672	6
107	中国	0.682	0.676	-1
119	アンゴラ	0.657	0.660	-1
120	日本	0.656	0.652	1
121	シエラレオネ	0.655	0.668	-10

【はじめに】

現代社会においてグローバル化が進んでいて、今の日本にとって国際関係は必要不可欠な存在と考えているので、私は学校内で最もグローバル化に関係している「グローバルが生み出す力」のゼミに入り、そこでSDGsを深く学び、今後の社会に活かしたいと思った。また将来海外関係の仕事につきたいと思うので早めに知識を得ることが必要だと考えた。

【序論】

SDGs問題と言っても難民問題や経済関係、環境問題など種類が多いので1点の問題に絞り込んだ結果、私は17種類あるSDGsの中である5番のジェンダーにフォーカスした。現在の日本は男性主体の社会がレギュレーション化しジェンダー指数が先進工業国の中でも低い現状である。日常生活にも男女関係の問題が発生している。ジェンダー指数が低い

理由は第二次世界大戦が終戦した後、男性主体の経済が一時的に成功してそこに未練があるので今の社会に至る。そこで「男は外に女はうちに」という通念が生まれ男女の性差意識は根強く、男女の協働および共同の社会を形成する上での制約となっている。18世紀半ばヨーロッパでは女性は、格差のもとにある市場経済から、性役割分担の思想の下に排除されてきたのである。そのため近年まで男女差別をなくすために女性の労働市場参加の拡大と男女双方の経済的自立や男女間の賃金、収入、年金差の縮小などの活動があり、ジェンダー指数を安定させているのである。ヨーロッパが取り組んでいる中で日本も積極的に導入するべきだと考える。そもそも日本人がどれほどジェンダーについて知っているか調査したところ、ジェンダーというカタカナ英語の理解率は10.0%であまり理解されていないことがわかる。(平成15年6月文化庁から引用)したがって日本人のジェンダー問題に関する意識が低いことがわかるのである。以下の問題を私たちはこのような例で解決策を考えた。

【本論】

まず私たちもある程度ジェンダーについて知識を広める必要があるので、ファミリー各自本を読んだ。私は「多様な社会はなぜ難しいか」(水無田 気流)を読み、生活市場に対する問題に着目した。その中で私が印象に残ったのはツイッターにて、総菜コーナーでポテトサラダを買おうとした幼児連れの女性が、高齢男性から「母親ならポテトサラダくらいつくったらどうだ」と言われるのを目撃した、というつぶやきが投稿された。これに13万件を超えるリツイートがつき「ポテサラ論争」と呼ばれ、話題となった。「母親なら」手間を惜しまず手作りの料理を用意すべきだという通念に対する反発と、ポテトサラダという一見簡単だが意外に手間のかかる総菜を、それ「くらい」と見な

す男性の家事見識のなさへの批判などが目立った。他の話題で、2歳くらいの子どもをショッピングカートに乗せている母親が、スーパーのATMに行ったとき、狭いためカートを横に置かず、後ろに置いて操作していた。そのほんのわずかな時間、子どもが私に抱きつこうとカートからはい上がってきた。気配に気づき子どもを抱き留めたが、カートは倒れそうになり、子どもは泣き出した。そのとき「何やってるんだ、ちゃんと見てろ!」と、後ろに並んでいた高齢男性に怒鳴られた。後ろ向きでものを見るのは極めて困難である。昔イチロー選手の守備で、打球に背中を向けて走りながら華麗に追いつきキャッチしたのを見て感動した覚えがあるが、母親業はイチローレベルの反射神経がなければ務まらないのか。周囲の女性たちの間でも、子どもがぐずっていたらうるさいと怒鳴られた、子連れで歩いていたら「母親のくせに化粧なんかしやがって」と言われた、などの話を耳にする。新型コロナウイルスによる「自粛警察」横行以前から、この国の母親たちは周囲の「正しい母親たるべし」というまなざしの「取り締まり」に遭ってきた。正義を盾に子連れの女性に説教してくる相手は、聞く限り高齢男性が多い。男性が上から目線で女性に説教することを「マンスプレイング」というが、その一環だろう。ただ母親たちに聞いたところ「注意する方も本気でそう思っているというより、正義を振りかざして構ってほしいのでは」との意見もあった。たしかに日本では、各種統計調査に鑑みても「母は家事・育児の要求点数が多く大変」だが「高齢男性は人間関係が希薄で孤独」だ。彼らが怒鳴ることでしか他人と接点を持ち得ないとすれば、その間は深い。どこからがどこまでが「女性らしさ」があるのか、「男性らしさ」があるのか、決まりごとではないがいつのまにか考えが概念化して、本来の性別の自由を私たち日本人は束縛していると私は考えた。私はらしさという言葉に着目した。日本の伝統的ジェンダーステレオタイプ(男女への偏った思い込み)の影響が大きいと思。「女性(男性)とはこういうものだ」という現状認識だけでなく、「女性(男性)は～であるべき」という規範的な意味合いも含まれることを私は確信している。女性には“美しさや協調性、従順さ”が求められ、男性には“独立性や強さ、リーダーシップ”などが求められるということがあり。例えば一番典型的なものでいうと、男は仕事、女は家庭。そういうジェンダーステレオタイプが「らしさ」の押しつけにつながると考えられる。では、なぜジェンダーステレオタイプが生まれるのか、ジェンダーステレオタイプは、人が生活していくうちに徐々に知識として蓄積されてくるものであり、世の中の男性と女性が、どういう役割についているか、どんな行動を取っているか、どのように評価されているかという現状を見たり聞いたりすることによって、あるいはメディアなどに登場する男女の描かれ方を知ることによって、それが虚実とリマゼン知識として蓄積されている。人は目の前の出来事や人物を判断する時に、頭の中にある知識の枠組みを使うが、「自分は今、こんな知識枠組みを使っている」ということを自覚できることは少ない。ある女性や男性一性について判断するときも、ジェンダーステレオタイプの知識の枠組みを深く考えず、無自覚に使っている。そのため、例えば数学の成績が良い女子生徒に対して「女子なのにすごい」というような反応が反射的に生じるわけである。この「～らしさ」をなくすために私一人で何ができるのか考えた。一人一人が価値観を受け入れ、また自分を大切に、「人は～らしく」という概念を崩して何事も受け入れる姿勢が必要だと私は思った。男女共同参画社会、ジェンダーフリー、女性学、フェミニズムなどに対する批判などが強まったと言っている。ジェンダーフリーは、「男らしさ、女らしさ」を全否定するものだという意見に対して、そうではなく、ジェンダーフリーは、男はこうあるべきだ(たとえば、強さ、仕事)、女はこうあるべきだ(たとえば、家事・育児...)と決めつける規範を押しつけないことと、社会の意志決定、経済力などさまざまな面にあった男女間のアンバランスな力関係・格差をなくすことを意味しており、一人ひとりがそれぞれの性別とその持ち味を大切に生きていくことを否定するものではないと日本女性学会は学会ニュース(2003年3月号外)で説明している。「女らしく、男らしく」から、「自分らしく」へ、そして、男性優位の社会から性別について中立・公正な社会をめざしているのである。「女らしさ」「男らしさ」をなくすことが「ジェンダーフリー教育」の目標ではなく、子供達の個性や主体性を性別で束縛するような社会的・文化的拘束を見直そうということが目標なのである。バブル経済が破綻後の不況の時期に橋本龍太郎首相(1996年1月から98年7月)が日本の構造改革のために男女共同参画社会実現が鍵であると最初に表明し、その後、1999年6月15日に男女共同参画社会基本法が可決(衆参全員一致で可決)、成立し、6月23日に公布・施行された(法律第

78号)。最終改正は1999年12月22日であった(法律第102号)。その前文は、「我が国においては、日本国憲法に個人の尊重と法の下での平等がうたわれ、男女平等の実現に向けた様々な取組みが、国際社会における取組みとも連動しつつ、着実に進められてきたが、なお一層の努力が必要とされている。一方、少子高齢化の進展、国内経済活動の成熟化等我が国の社会経済情勢の急速な変化に対応していく上で、男女が、互いに人権を尊重しつつ責任を分かち合い、性別にかかわらず、その個性と能力を十分に発揮することができる男女共同参画社会の実現は、緊急な課題となっている。このような状況にかんがみ、男女共同参画社会の実現を21世紀の我が国社会を決定する最重要課題と位置付け、社会のあらゆる分野において、男女共同参画社会の形成の促進に関する施策の推進を図っていくことが重要である」と述べている。男女共同参画は個人・個性を尊重する考え方で、その根底に社会に、性別による不平等や女性に対する差別が存在すると認識し、それらを撤廃しようとする思想や運動の総称であり、個人の尊重と平等、公正な社会をめざすヒューマンズムの一種であるフェミニズムがある。フェミニズムは単に女権拡張、つまり女性が男性並になったり、女尊男尊の社会をめざしているのではなく、女性も男性も「女だから」「男だから」ということから解放されて、性別にかかわらず、自分らしく、お互いを尊重しあえるような対等な人間関係をつくりだしていくこと、多様性を認め、誰もがありのままの自己表現ができること、自分を愛せることで他の人の命を大切にす、人権が尊重される社会、暴力、力による強制のない平和な社会をつくることをめざしている。基本法の前文は「男女共同社会の実現を21世紀の我が国社会を決定する最重要課題」であるといい、国、地方公共団体、国民に責務を課している。国の責務は、「男女共同参画社会の形成についての基本理念(以下「基本理念」という。)にのっとり、男女共同参画社会の形成の促進に関する施策(積極的改善措置を含む。以下同じ。)を総合的に策定し、及び実施する責務を有する」(第8条)、地方公共団体の責務は、「地方公共団体は、基本理念にのっとり、男女共同参画社会の形成の促進に関し、国の施策に準じた施策及びその他のその地方公共団体の区域の特性に応じた施策を策定し、及び実施する責務を有する」(第9条)とある。国民の責務は「国民は、職域、学校、地域、家庭その他の社会のあらゆる分野において、基本理念にのっとり、男女共同参画社会の形成に寄与するように努めなければならない」(第10条)。「国及び地方公共団体は、男女共同参画社会の形成に影響を及ぼすと認められる施策を策定し、及び実施するに当たっては、男女共同参画社会の形成に配慮しなければならない」(第15条)。この配慮については第4条で「男女共同参画社会」の形成に当たっては、社会における制度又は慣行が、性別による固定的な役割分担を反映して、男女の社会における活動の選択に対して中立でない影響を及ぼすことにより、男女共同参画の形成を阻止する要因となるおそれがあることにかんがみ、社会における制度又は慣行が男女の社会における活動の選択に対して及ぼす影響をできる限り中立なものとするように配慮しなければならない」つねに性別で人間を分類していると女性と男性が異なる存在であり、だから役割も違って当然という意識がつくれ、固定観念を持ち、性別役割を固定化してしまい、「思い込み」が人間を見る上での当然の認識枠組みとして固定されている場合、それからの「逸脱」は、しばしば「異常」として位置づけられる。このような「思い込みから「男や女には生物としての厳然たる差異があるにもかかわらず、それを無視して男女を同じにしようとすることは自然の摂理に反する」という言説があり、現在の日本の一部において「ジェンダー」や「ジェンダーフリー」という用語が誤解をもって論じられているが、その誤解をとくために適切でわかりやすい「ことば」や表現方法を練磨しなければならない。生物としての性差のあるがままのありようと、社会的文化的ジェンダーの現象と、生活する個人のセクシュアリティを含む人間としての尊厳の問題を混同してはならない。「ジェンダーは、人間の生物としての性差や個人としての個性を、無視したり否定するものではない...ジェンダーは一人ひとりの個性ある人間の尊厳を尊重し、多様性を認めながら共存することが可能な社会を築くための研究である」(国際ジェンダー学会 2003:25)

## 【結論】

本論文では、私たちが「男らしさ」や「女らしさ」をどのように考えているのか、また、国が促進している男女共同参画の在り方について分析した。私はジェンダーの問題をポジティブに捉えていく必要がある。家庭、企業、国で並行して意識改革が必要であり、働く環境、育児をする環境双方から、互いに両立し、ジェンダー平等社会が実現できると考え、コスト面を考えるとこれらが早急に改善されることは現実的ではないかもしれない。しかし、費用をかけてでも雇用や保育レベルの質は向上、維持されるべきであるし、個人個人がこの問題に向き合い考えることで状況は少しずつでも改善されていくはずである。そこに関しては、ジェンダーに関する教育を受け男女平等が当たり前の風潮で育った現代の若者たちが必要である。概念的な「男性らしさ」「女性らしさ」を前提に、そして社会が目指す男女平等を中心に論じたが、男だから女だからという基準や壁がなくなれば、ジェンダーマイノリティに関しても生きやすい社会が開けてくるのではないだろうか。

#### 【おわりに】

本論の執筆において、ジェンダー問題に限らず、なにかを偏見でひとくくりにして考えてしまうことの恐ろしさを改めて感じた。そして、今ある常識や認識が何十年後には一変してしまうこと、いつまでも昔の風潮に固執して誰かの苦しみを生まないためにも、色々なことを知り学んでいくことの重要性を理解できた。自分自身も、これから社会に出て働き結婚や出産をするかもしれない未来でも、多様性を柔軟に受け入れていくことを意識し続けたいと考えた。